

2. 規模の問題

建物の規模に問題があります。現国立競技場は前回1964年のオリンピック時にスタンド増設をおこなったのですが、競技場の播り鉢構造のトップの部分、建築物の壁の高さは30mに抑えられており、照明スタンド頂部でも54mです。現在建て替えを前提に進められている新国立競技場はそれらをはるかにしのぐ70mで計画されています。平面計画における敷地との関係に対しても現国立競技場の敷地を大幅にはみ出して、日本青年館や明治公園の敷地まで取り込む規模であり、特に周辺道路まで敷地に余裕がないまま、70mの高さに向かって壁面がせり出すように立ち上がるものです。現在の国立競技場周辺の余裕のある公開緑地の環境やスカイラインを大幅に損なう計画となっています。

こんなにある！新国立競技場 建て替え計画の諸問題

5. 建設の問題

建設の見取り図となる設計案が出来上がっていないため、正確な予定工事費の算出が出来ていません。コンペは設計図としての整合性を問うものでなかったために、現時点で計画案は通常の建築物とはかけ離れた3次元CGによるデザイン画のままでしかありません。これでは構造方式や資材や施工方法も不明であるため見積もりできないのです。また、この規模の建物工事における資材の設置場所や構造組立のための作業スペースが敷地に不足しており、周辺道路の封鎖も含めた施工計画が必要になります。東北震災復興も途上の日本の建設界では深刻な職人不足や資材不足の中、さらなる工事費の高騰が予想されます。

6. 運営の問題

建て替え理由のひとつにオリンピック開会式における8万人収容を前提としています。IOCではそれを開催の絶対条件とはしていません。むしろコンパクトなオリンピック開催を提唱しているほどです。また、新国立競技場の計画案はスポーツ施設として機能的に不完全な建物です。巨大な規模を有する新競技場ですが、陸上競技大会に必須のサブトラックの併設が出来ていないという致命的な機能不備があります。さらに施設運営上、イベントコンサートでの集客を見込んでいるようですが、少子化が進む今の社会情勢において8万人規模の動員力のあるイベントなど今後さらに難しくなっていくことが予想されます。

2014年5月12日
配布資料

1. 計画の問題

2012年度7月に開催されたデザインコンペは世界中からオープンに提案を集めるという謳い文句とは裏腹に、実際には国際的な建築賞受賞者に限るといった応募者を極端に絞り込んだものでした。特に日本建築学会賞受賞者を応募資格に含めていないという点でも国内設計者を排除しようというものです。さらに応募申込みから締切まで2か月程度しかなく十分な調査検討も不可能なものであり、計画地の文化・歴史的経緯の解説も不足しているため、海外からの応募者は地域性を考慮できないものでした。審査員に名を連ねていた著名な外国建築家は審査会に参加することもなく十分な議論が尽くされたとは言い難いものなのです。また審査経過や有識者会議、審査会議事録も発表されず、審査委員長の安藤忠雄氏は未だにノーコメントを貫き、他の審査員も説明責任を果たしていません。

大変なことに
なってますよ！



作成：
建築工コノミスト
森山高至

3. 景観の問題

歴史的な連続性と文化的価値をもった周辺景観を壊します。周辺は明治天皇崩御の折に造営された明治神宮外苑の中心に隣接しています。外苑は神宮本殿のある内苑と対になり、明治・大正・昭和と都心の限られた緑のオアシスとして守られてきました。中心をなす聖徳絵画館と銀杏並木、周囲の森は、かつて多くの国民の寄付や奉仕活動によって100年という長い時間をかけて造られた鎮守の杜なのです。そのため外苑の景観を保持する目的もあり、周辺には建築物の高さを制限する風致地区指定がかけられていましたが、この建物の為と称し、昨年この規制を破棄しています。

まだ間に合います
考え直しませんか！



7. 費用の問題

当初のコンペ募集時の想定予算は1300億円でしたが、選出した提案の予想見積もりは3000億円と見込まれました。その後、施設規模を2割削減して1700億円という発表がなされましたが、それは設計図がまだ未定の状態であるため信用できる数字ではありません。また新国立競技場建設に合わせてJSC本部ビル建設(270億円)も予定しているため現時点で1970億円です。これに対し施設の収支予想が支出46億円に対し収入50.4億円と見込んでいます。このうち興業イベント収入が12.1億円、コンベンション収入5.2億円と予想していますが、これらの収入は蓋をあけてみなければわからない数字です。しかも、興業イベントに必須とされている施設の開閉式屋根の設計は未だに解決をみません。投資額1970億円に対する年間収入50.4億円というのは2.6%にしか過ぎず利益4.4億円というのは0.2%でしかありません。この資産における興業イベント収入が半減した場合、年間2億円の赤字を垂れ流し続ける施設と成り果てます。

4. 設計の問題

新国立競技場のデザイン提案以降、建設に至るまでのプロセスには基本計画、基本設計、実施設計、工事見積とまだまだ多くの克服すべき課題が満載しています。しかしながら最初の基本計画そのものがコンペ募集時に十分に練られていなかったため、デザイン提案後に基本計画を始めており、基本設計が大幅に遅れています。2014年3月末に予定されていた基本設計案は雪の重さに耐えられないということが判明し、再設計中と発表されています。その原因は主に新国立競技場の巨大な橋梁と同等の構造規模の大きさによるものです。その巨大さは大阪湾に設置された港大橋に匹敵するものであり、構造強度だけでなく建物の基礎構造設計にも多大な負荷をかけるものとなっています。